

令和 2 年度 ECO-TOP プログラム認定検討会（第 1 回） 桜美林大学の更新申請及び東京薬科大学の認定申請に係る論点

（1）桜美林大学の更新申請について

◆ 過年度の変更申請

平成 26 年度の更新申請後、平成 27、28、30、31 年度に申請があり、下記に示すような点に変更があった。

【過年度の主な変更点】

- ・担当教員の変更
- ・科目名の変更（企業と環境、企業とエネルギー、自然理解（ヒトの生物学）、自然理解（生物の一様性と多様性）、自然理解（環境問題入門）、社会理解（環境の科学）、観光地域振興論）
- ・科目の廃止

科目名	当時の検討会のコメント
学際・統合科学基礎 （地方政治と環境政策）	行政のインターンシップを行う前段としても有効な講義科目であり、科目廃止は残念だが、ECO-TOP 総合科目数は十分にあるため廃止について問題はない。
企業と環境	選択必修科目は、桜美林大学はそのほかに 7 科目あり、その中から 2 単位を取得するというような選択必修の形式となっている。このため、1 科目の単位を取得すればいいので、今回は 1 科目廃止となったが、特に運営上は問題ない。
自然理解（物質の世界） （旧科目名：自然科学基礎（物質の世界））	こちらの科目の廃止に伴い、自然理解（実感する化学）で新規開講ということで、新規開講科目の内容も ECO-TOP の視点から合致しており問題ない。

- ・履修モデルの変更（基盤教育科目（18 単位必修）⇒キリスト教理解（2 単位必修）と LA 基礎（16 単位必修）の 2 区分に分割）
- ・科目の追加（社会理解（環境問題と環境法）、エコビジネス、自然理解（実感する化学））
- ・分野の変更（「社会理解（環境の科学）」選択必修科目への移動、）
- ・責任者及び教員体制の変更

◆ 今回更新申請における主な変更点

- ・学科等の概要の変更（学科の目的、教育概要）
- ・科目の担当教員の変更
- ・履修モデルの変更
 - ① 各分野（自然科学、社会科学、人文科学）ごとにあった「4 単位選択必修」「2 単位選択必修」「選択科目」について、一律に「6 単位選択必修」に変更
 - ② ECO-TOP プログラム総合科目に位置付けられていた次の科目を各分野（自然科学、社会科学、人文科学）に移動
生物学概論、化学概論、自然理解（生物の一様性と多様性）、社会理解（環境の科学）

(履修モデルの変更理由)

桜美林大学リベラルアーツ学群の 2021 年度カリキュラム改定により、所属学生は、2021 年度入学生よりメジャー（主専攻）とマイナー（副専攻）の必修化、専攻演習等の必修化などが導入されるため、科目の選択に自由度がないと時間割バッティングという学生には責任のない事由によりプログラムを完成できないおそれがあることから、履修モデルの変更を行った。

・科目の廃止

<自然科学分野>

生物学実験Ⅰ、生物学実験Ⅱ、無機化学Ⅰ、無機化学Ⅱ、基礎有機化学、有機合成化学、気象学Ⅰ、気象学Ⅱ、地質学Ⅰ、地質学Ⅱ、生体物質化学、海洋学、自然科学基礎（天文学）、感覚公害論、環境化学

<社会科学>

環境ビジネス論、環境と情報、環境・エネルギー政策論、観光リゾート開発論、観光地域振興論※、持続可能な開発、食品安全論、国際関係論、国際協力論、エコロジーデザイン特別講義

<人文科学>

環境・生命・人権の哲学、地理学概論、江戸から学ぶ環境、オーラルコミュニケーション（話す）、オーラルコミュニケーション（きく）

<ECO-TOP 総合科目>

環境と文明、専攻入門（環境学）、環境科学総合演習、救急救命演習、地学概論、自然科学基礎（ヒトの生物学）、自然理解（実感する化学）※、ECO-TOP インターンシップⅠ、ECO-TOP インターンシップⅡ

※ 過去の変更申請による科目名称の変更又は新規追加科目

・科目の新設

地球システム科学、生活環境調査法、地球環境調査法、環境アセスメント論、SDGs とグローバルガバナンス、環境リスク論、人文探求（非言語コミュニケーション入門）、コミュニケーション学入門、環境学入門、ECO-TOP インターンシップ A～D

(科目の新設・削除理由)

今回の更新申請に合わせて、履修モデルの変更に伴い、ECO-TOP プログラムの目指す人材の育成のためへの必要性を整理し、科目の新設・廃止を行った。

これらの削除された科目の多くは、ECO-TOP プログラムの中心科目として設定することを推奨されている科目ではなく、新設科目には ECO-TOP プログラムの中心科目として設定することを推奨されている科目も含まれ、ECO-TOP プログラムに与える影響が小さいため削除することとした。

- ・分野の変更（文系のための環境科学：社会科学分野→自然科学分野）
- ・人材育成の理念におけるカリキュラムの特徴の変更

- ・教員体制の変更

◆ 論点のポイント

- ・カリキュラムが大きく変更されているものの、自然科学分野で 38 単位、社会科学分野で 28 単位、人文科学分野で 12 単位、ECO-TOP プログラム総合科目としてのカリキュラム導入科目 2 単位及びインターンシップ 4 単位を設定しており、実習・演習型科目も 6 単位以上あることから、ECO-TOP プログラム認定審査基準における教育の量を確保している。
- ・自然科学分野においては、「生物学概論」「生態学Ⅰ」「生態学Ⅱ」「植物学Ⅰ」「植物学Ⅱ」などの科目が、社会科学分野においては「環境法学」「環境経済学」「環境社会学」「環境と地域」などの科目が、人文科学分野においては「環境倫理学」「集団コミュニケーション」「環境教育論」などの科目が設定されており、ECO-TOP プログラムにおける中心科目がまんべんなく設定されている。
- ・SDGs とグローバルガバナンスなどの今後の ECO-TOP プログラムとしても重要な視点も加わったカリキュラム構成となっている。
- ・インターンシップは、各 2 単位の「ECO-TOP インターンシップⅠ」「ECO-TOP インターンシップⅡ」から、各 1 単位の「ECO-TOP インターンシップ A~D」に変更されたことにより、インターンシップ先の調整がしやすくなり、インターンシップの参加時期についても学生に選択の幅が広がった。

(2) 東京薬科大学の新規認定申請について

◆ 論点のポイント

- ・ECO-TOP プログラム認定審査基準等の改正後初めての認定申請である。
- ・自然科学分野で 27 単位、社会科学分野及び人文科学分野で各 8 単位と ECO-TOP プログラム総合科目として 4 単位、インターンシップも 2 単位設定しており、実習・演習型の科目も 7 単位あることから、ECO-TOP プログラム認定審査基準における教育の量を確保している。
- ・ECO-TOP プログラム総合科目については、「応用生命科学概論」で学科の特徴である環境や食糧、資源及び健康を、「生命科学Ⅰ（地球環境論）」で地球環境全般について学習し、「生命科学と社会Ⅰ（大学入門）」において、社会での活用について学ぶよう、複数の科目を総合的に組み合わせて ECO-TOP プログラムの導入科目として設定している。
- ・人文科学分野については、ECO-TOP プログラムとして推奨する科目である環境倫理等について学ぶだけでなく、グローバルに科学論文などから情報を収集し、自らが諸環境を理解するための能力を育む目的で設定されている。
- ・社会科学分野については、食品などの身近な題材から現代社会に欠かせない情報技術（情報の収集と発信等）、生活を取り巻く法律や経済などを学ぶものとなっており、環境法制度及び環境経済学について取り扱う科目を設定しているほか、現代の多様化する社会を理解するために情報科学についても学ぶ。